特集3

蒲原の古墳 ―企画展開催に向けて―

小林 隆幸

ヤマトの王の墓として古墳がつくられ始めたのは三世紀半ば頃とされています。その先がけが卑弥呼の墓として有力視されている箸墓古墳です。奈良盆地東南部の三輪山山麓に、それまでにない巨大な前方後円墳として出現しました。その周辺に当時のヤマトの国の中心があり、大王の古墳がつくられて行きます。その後、四世紀後半には古墳の中心が奈良盆地北部に移りますが、奈良盆地に政権の中心があった四世紀に、蒲原でも地域を束ねる有力者が現れ、古墳がつくられました。

特に西蒲区の角田山麓には、前方後円墳の稲場塚古墳、前方後方墳の山谷古墳、そして鼉龍鏡を持つことで有名な前方後円墳の菖蒲塚古墳が継続して築かれ、この時期の蒲原の中心地であったことがわかります。また、三条市保内の丘陵上にも、前方後方墳の三王山四号墳、円墳の二号墳、前方後円墳の一号墳が継続して築かれました。これらは他の古墳も含めて三王山古墳群と呼ばれています。なお、豊富な副葬品を持ち、県内最大の前方後円墳である可能性が高まった胎内市の城の山古墳も四世紀につくられています。

四世紀末から五世紀初めには、ヤマトの国に大きな変化があらわれます。奈良盆地にあった国の中心が大阪平野に移動するのです。それに伴って大王の古墳も大阪平野につくられるようになります。巨大前方後円墳が数多く築かれる古市古墳群や百舌鳥古墳群がそれです。この時期、蒲原でも古墳に変化があらわれます。角田山麓や三条市保内の丘陵上など、それまで連続して古墳が築かれた地域に古墳はなくなり、新津丘陵上に大円墳の古津八幡山古墳が出現します。直接の原因究明は今後の課題ですが、このようにヤマトの中心で見られる変化が蒲原の古墳にも見て取れます。奈良盆地にあった時のヤマト政権と結びついていた角田山麓などの有力者が、政権が大阪平野へ移動することで力を失い、かわって新政権と結びついた新興勢力が、古津八幡山古墳などを築いたのでしょうか。新津丘陵側には、古津八幡山古墳を最大規模に同じ円墳が点在しており、それらが信濃川をはさんで角田山麓の古墳と対峙するような位置にあることも興味深い点です。

その後、五世紀前葉には県内初出土となる円筒埴輪を備えた円墳・牡丹山諏訪神社古墳が築かれます。その埴輪が古市古墳群の誉田御廟山古墳（伝応神天皇陵）のものと共通することから、その工人が関係してつくられた可能性があることを新潟大学の橋本博文教授は指摘しています。

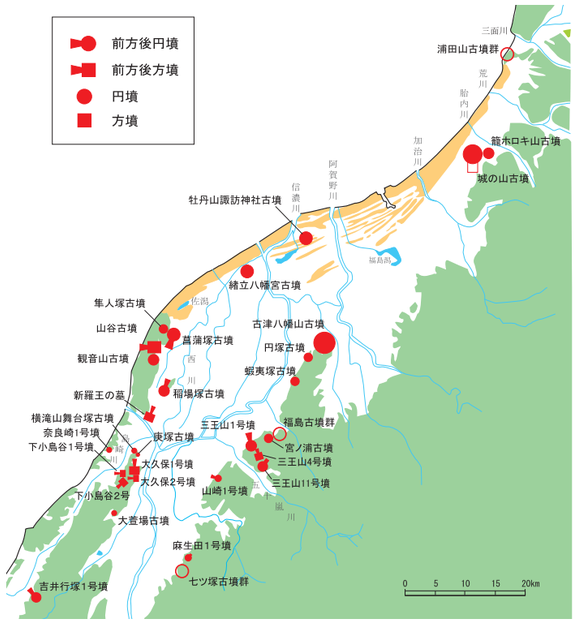
五世紀後半の古墳は蒲原では見つかっていません。新潟県内では、それまでの古墳の分布の中心は蒲原でした。それが蒲原では古墳が築かれなくなり、魚沼そして頸城に多くの古墳が集まる群集墳がつくられるようになります。五世紀後半とは中国と交渉があった倭の五王最後の雄略大王が活躍し、官人によって政権を強化する新たな政治体制が組まれた時期です。これによって地方も整理され、それまで古墳が築かれてきた蒲原には、新体制と結びつく有力者がいなくなってしまったのかもしれません。

魚沼に築かれた群集墳の被葬者は、新体制の中で台頭してきた勢力とも考えられます。その有力者の墓には武器や武具、馬具が備えられ、それまでの蒲原の有力者とは様相が異なります。

六世紀に入ると蒲原で再び古墳がつくられるようになります。断絶していた三王山古墳群にも古墳がつくられ、あたかも伝統的な有力者が息を吹き返したかのようです。また日本海を見渡す村上市の海岸砂丘上には海人集団との関わりも指摘されている浦田山古墳群が築かれるなど、新たな集団の動きも見られます。しかし古墳の数は少なく、新潟県内の古墳の中心は頸城に移っています。この時期に蒲原で古墳を築いた有力者が、この後蒲原に配置された地方官である高志深江国造につながっていくのか、それとも新たな有力者が国造に任命されるのか興味深いところです。

以上、七月十八日～八月三十日の会期で開催する「蒲原の古墳」展に先がけ、当地に築かれた古墳の動向を簡単にまとめてみました。

（こばやし たかゆき 学芸員）



館長日記

みなとぴあ Diary from the Director of a Museum

新潟市歴史博物館 館長 小林昌二

牡丹山諏訪神社古墳と王権

牡丹山諏訪神社古墳の発掘調査が昨年九月に行われ、出土の須恵器片から築造が五世紀前半と裏づけられました。出土の遺構・遺物などの考証による知見は明快です。筆者専門の文献古代史では、一次史料は稀ですし、編纂史料の『古事記』や『日本書紀』（以下『記』・『紀』）では、事実を踏まえることは困難です。ですが、何か一つでも二つでも文献から理解を深めたいのは専門家のサガです。

橋本博文新潟大学教授は、古墳発見の契機となった円筒埴輪に見えるB種横ハケ技法は、応神天皇陵と伝えられる誉田御廟山古墳の埴輪にも見られ、この技法は王陵系のものと指摘します。また、中国の史書によれば、仁徳天皇とみる説が有力な倭王讃が、使いを派遣したのは四二一年です。とすればと『記紀』の応神・仁徳天皇の巻を開いてみます。

『紀』を見ると、応神の在位期間は四一年、仁徳は八一年です。寿命は応神一一〇歳、仁徳は記事が有りません。また『記』では、寿命が応神一三〇歳、仁徳八三歳とあります。信憑性は乏しく、時代の特定には役立ちません。

『紀』の応神紀四〇年正月の記事に、応神天皇が長子オオヤマモリノミコト（大山守命）と次子オオサザキ（仁徳）に、長子と末子とでどちらを親としていとおしいと思うかと問うくだりがあります。天皇の気持ちを察したオオサザキは末子だと答えます。その後天皇は、オオヤマモリノミコトに「山川林野」、オオサザキに「国事」、末子のウジノワキイラツコに「日嗣」、つまり天皇位を継がせます。また『記』でも、応神天皇が長子大山守命に「山海之政」を、次子の大雀命（仁徳）に「食国之政」を、末子のウジノワキイラツコに「日嗣」を継承させたとあります。もとより記事の信憑性は乏しいのですが、この話は王権の肥大化と分化を物語り、王陵古墳の巨大化と対応するように思われます。

そんな王権と密接に関連する王陵系のB種横ハケ技法埴輪を立て並べる牡丹山諏訪神社古墳の被葬者には、並々ならない副葬品がともに埋納されていたのではないかと想像させてくれます。

収蔵資料紹介

差上申一札之事

慶応三（一八六七）年に新潟町を検分した幕府役人の報告書によると、新潟町の畳は、備後・近江・加賀・越中等から草を仕入れて、町で仕立て、地元周辺だけでなく松前・南部等へ送ったとあり、とくに藁が手に入りにくい松前等では重宝されたと思われます。

廻船によって運びこまれた材料を、職人が地元の材料と組み合わせ、加工し、製品に仕上げ、廻船で他所へ売りにゆく。畳は、中継と加工という湊町新潟の商業機能の特色をよく示した商品と言えそうです。

新潟町の畳屋は元禄十（一六九七）年に九軒、元治元（一八六四）年には三十六軒あったとされます。今回取り上げる文久三（一八六三）年六月の「差上申一札之事」は、この畳屋に関する資料です【写真①】。

これによると畳屋には本職と弟子職があったことが分かります。このうち本職が規定をつくりました。それは、弟子職が「年季明」、つまり修業期間を終えて「本職仲ケ間入」をするさいに金銭を支払わなければならないというもので、弟子職にとっては本職へ参入する障壁となるものでした。

これに対して新潟町検断の田辺道助と年寄の弥兵衛は、この規定そのものだけでなく、こうした本職たちの「自己」二規定取極「候趣」を「悪弊」を生むもとであるとして差し止めるように命じました。

畳屋たちは命令を受け入れました。そのあかしに畳屋一同の連名で請印を押した請証文を町会所へ提出しました。この請証文を道助・弥兵衛が新潟奉行所へ提出したものが、本資料「差上申一札之事」です。この請証文によって弟子職も含めた畳屋一同の名前と人数が分かります。

連名の筆頭は徳左衛門です。彼は年不詳ですが新潟町の長者番付に畳屋としては最上位に記載されている「他門五ノ丁高橋徳左衛門」だと推定されます。

また、連名の途中に「〆」と記されている箇所があります【写真②】。この「〆」をさかいに、前は本職、後は弟子職に分かれると思われます。人数を数えてみると、本職は三四人、また弟子職は二九人いたことが分かります。よって、翌元治元年の三六軒という数は本職のみを数えたものと思われ、それ以外にも三〇人前後の弟子職がいたことが推定されます。新潟町の畳はこうした人びとによって支えられていたのです。

（安宅 俊介 学芸員）

《参考文献》
新潟市史編さん近世史部会編『新潟市史』資料編2近世Ⅰ、一九九〇。